恐れるな、アブラムよ

──アブラハムのある一日

創世記１５：１‐２１



司祭　ヨハネ 井田　泉

2010年8月8日

京都聖三一教会にて

　わたしたちの信仰の先祖はアブラハムです。今から4000年くらいも前でしょうか。アブラハムの生涯は175年と伝えられますが、その生涯の半ばで神さまを決定的に経験する出来事が起こりました。それが今日朗読された創世記第15章に記されています。今日はある日の夜から次の日の夜まで、およそ24時間の間に起こったことを見つめてみることにします。

　　1.　星を仰ぐ

　アブラハム（当時はまだアブラムと言いました）は主なる神の言葉に促され、その約束のみを頼りとして、自分の国を出て、親族と別れて、主が示された地にやって来ました。カナンの地。今のパレスチナです。しかしこの地での生活は容易ではありませんでした。飢饉を避けてエジプトに逃れ、カナンに戻って今度は、おいのロトと別れるという悲しみを味わいました。

年月が過ぎるにしたがって、アブラハムは何とも言えぬ孤独と不安、空しさを感じるようになりました。幾度も厳しい試練に会い、多くの困難をかかえて、安住しうる土地を見出せず、約束の子どもも与えられないままに年老いていく。自分をここに導いたのはほんとうに生ける神であったのか、それとも愚かな自分の思い込み、幻想であったのか、という疑いを、彼は心の奥底に感じることがありました。家族、一族の安全と将来に責任を持つ彼としては、それを表に現わすことはできません。疑いが大きくなると、恐ろしい不安が彼を押し包みました。

神は長く沈黙しておられます。

　この日の夜遅く、暗い天幕の中で彼の心は重く沈んでいました。突然、主の言葉が幻のうちに彼に臨みました。

「……『恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。』

アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。』……見よ、主の言葉があった『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』」。15：1‐4

　けれども、アブラハムは容易にその言葉を受け入れることができません。そのようなことがありうるでしょうか。

　主は彼を外に連れ出されました。暗い天幕から出たアブラハムはあまりの明るさに驚きました。満天の星。

「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』
　アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」。15：5‐6

　「アブラムは主を信じた」と記されています。

　十分理解し、納得したというのではありません。自分の心は闇です。しかし神が示されたのは満天の星でした。星々の輝きがあなたの将来を示している、と主が言われます。満天の星に照らされて彼は主の臨在を感じ、彼は恐れつつ信じました。自分の将来を主の御手に委ねました。主を信じて従う歩みが、ここでもう一度始まります。

　神は私たちにも「外に出なさい」と言われます。自分の自信と気負い、自分の不安とあせり、自己卑下、揺れ動く自己評価から外に出なさい、と言われます。アブラハムとともにわたしたちも聞きます。「外に出なさい。天を仰いで、星を数えてみなさい」。あの無数の星の輝きがあなたの将来です。

　　2.　禿鷹

　満天の星を仰いで、アブラハムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。

「主は言われた。『わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。』

アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。』｣15：7‐8｡

　アブラハムは主の言われる言葉を一心に信じたい。そのまますべてを受け入れたい。しかしあまりに現実は重くて、今の生活もしばしば脅かされる状態です。ほんとうに神の約束が真実である、という確証がほしい。しるしがほしいのです。

　神はそれを拒まれませんでした。

　夜が明けた頃でしょうか。主は言われました。

「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」15：9。

　牛と山羊と羊を用意する。アブラハムは主が意図しておられるかがわかりました。これは契約の儀式の用意です。

「アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。」15：10

　当時の契約のやり方です。契約の両当事者が、このように裂いて置いた動物の間を通ります。これによって、もし契約を破るならば呪われて自分の体がこのように裂かれてもよい、ということを表すのです。「呪いを含む契約」とも言われます。そのように契約は命をかけるものでした。神は、ここにご自分の命をもって臨もうとしておられる。アブラハムもまた、自分の命をここにかける思いで牛と山羊と羊を用意し、それらを二つに切り裂いてそれぞれを互いに向かい合わせに置きました。

　アブラハムは待っています。神が次に何をせよと言われるかを待っています。暑い日中を緊張しながら待っています。時間が過ぎていきます。

　空に動く影があります。いやな予感がしました。禿鷹です。禿鷹が、切り裂いて置いた動物の死体をねらって降りて来るのです。

　これは違う。アブラハムが心をこめて、自分の命をかける思いで神に献げたものなのです。それを食い荒らそうとは何たることか。

「禿鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。」15：11。

　何事も起こりません。禿鷹を必死で追うだけの長い一日が暮れていきます。

昨夜はろくに寝ておらず、禿鷹を追い払う日中の戦いで疲れが出たのでしょうか。アブラハムは深い眠りに襲われました。

「日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。』」15：12‐16

　眠りの中での恐ろしい大いなる暗黒。その恐怖の中で神の語られる声が聞こえました。それは、彼とその子孫が将来経験する苦難の予告と、にもかかわらず必ず与えられる神の救いの約束の言葉でした。

　　3.　契約の火

　この夜は前夜とは打って変って、全くの闇夜です。前夜、明るい星の光の中で主なる神を経験したアブラハムは、この夜は恐ろしい暗黒の中で主なる神の声を聞いたのです。

　暗黒の中に、突然火が燃え上がりました。燃える松明が、あの切り裂いて置いた動物の間を通って行きます。

「日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える。……』」15：17‐18。

　恐ろしい暗黒の中に、突如として火が燃え上がるのをアブラハムは見ました。その火、燃えるたいまつは、あの裂いて互いに向かい合わせて置いてあった動物の間を通り過ぎました。

　燃える松明が動物の間を通って行く。これは何でしょうか。それは神です。愛に燃える神です。

　眠っているのか目覚めているのか。アブラハムはただ燃える松明が通って行くのを見ています。

　神が契約の当事者となられた。割かれた動物の間を通って行かれる神は、その契約に背くなら自分が割かれてもよい。自分に呪いが降りかかってもよい。神がそう示しておられます。

　神はアブラハムとその子孫を必ず守り抜く。その生涯と使命をまっとうできるように神が命をかけて責任を持たれるのです。

　これが契約ということです。これが神のわたしたちに対する愛です。

　神が主導権を持たれます。けれどもわたしたちはただ傍観者なのではありません。わたしたちが献げたものの間を通って行かれるのです。わたしたちは神の断乎たる決意の手でわたしたちを掴まれました。わたしたちもまた、アブラハムのように迷いと不安を持ちながら、困難をいっぱい抱えながら、しかしわたしたちを愛してわたしたちを決して見捨てられることのない神を信じて、従っていくのです。愛によって神に掴まれたから、わたしたちも愛によって神を掴み返します。

4000年前のアブラハムのとき、動物の体が裂かれました。暗黒のうちに火が燃えて、神の愛が注がれました。

2000年前、真昼の暗黒の中、神の小羊、主イエスの体は十字架の上で裂かれました。裂かれた主イエスの体と心のうちに、愛がわたしたちのために燃え上がりました。

「わたしはけっしてあなたがたをわたしは見捨てない。わたしは呪いを引き受けてでも、あなたがたを守り導く。だから恐れるな。」

「『山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない』とあなたをあわれまれる主は言われる」イザヤ54：10。